

## コーヒー豆を大量に誤食して多臓器障害を呈した一例

○谷 章禎、松方 聡、飯野 泰子、塗木 貴臣、中村 篤史

TRVA 夜間救急動物医療センター

### ・はじめに

カフェインやテオブロミンを含むメチルキサンチン類は犬において頻繁に中毒が報告されている (Cortinovic C ら, 2016)。最も頻繁にメチルキサンチン中毒が報告されている食品はチョコレートなどのカカオ類であり、主にテオブロミンによる中毒症状が認められる (Weingart C ら, 2021)。一方で、カフェインによる中毒はカフェインを含む人用薬剤の誤食の報告が多い (Cortinovic C ら, 2016)。

今回、コーヒー豆の大量誤食によるカフェイン中毒を伴う多臓器障害を呈した症例を経験したため、その概要を報告する。

### ・症例について

ヨークシャー・テリア、8歳、避妊メス、体重 2.4kg。当院来院 10 時間ほど前にコーヒー豆を 100g ほど誤食したため、かかりつけ医受診し点滴治療をうけ帰宅したが、帰宅後コーヒー豆混じりの嘔吐、下痢を認めたため当院受診。来院時には運動失調、異常興奮状態であり、発熱および頻脈、低血圧を認めた。血液検査にて低血糖、電解質異常、肝酵素上昇、凝固時間延長を認めたため、糖液補充、活性炭投与、静脈点滴、抗生剤による治療を実施した。明け方に一度かかりつけ医へ移動し静脈点滴を実施した後、夜間管理のため当院を再来院した。

再来院時は、起立困難、四肢冷感を認め、ECG で有脈性 VT を確認した。低血糖が認められたため、糖液補充、静脈点滴、抗不整脈治療 (リドカイン) を実施した。明け方には、ECG は洞調律、抗不整脈の休薬が可能となったが、血漿黄疸・凝固時間のさらなる延長・メレナが認められ、肝障害および消化管障害に伴う preDIC が疑われた。その後、同治療の継続および輸血処置を実施し、再来院 60 時間後には自力採食可能、消化器症状が消失した状態でかかりつけ医に移動し、継続治療となった。

### ・考察

犬におけるカフェインの LD<sub>50</sub> は 140mg/kg と報告されている (Spector WS ら, 1956)。コーヒー豆に含まれるカフェイン量はおよそ 10-20mg/g である (Fox GP ら, 2013) ため、本症例が誤食したコーヒー豆の総カフェイン量は 416-932mg/kg と、LD<sub>50</sub> をはるかに超えた量と考えられた。カフェインはアデノシン受容体の非選択的阻害などの機序により、主に循環器・呼吸器・中枢神経系を障害する (Henssel M ら, 2017) が、本症例においては消化管・肝障害も重度に生じ、重篤な状態に至ったと考えられた。カフェイン誤食時は、早期の催吐処置や胃洗浄、活性炭の投与による除染処置が重要と思われた。